

# 南ドイツにおける民俗衣装とその継承

高橋 知子  
愛知学泉大学

## Folk Costumes and their Succession in South Germany

Tomoko Takahashi

キーワード：民俗衣装 folk costume、衣装博物館 costume museum、同好会 club

### 1. はじめに

このたび筆者は 2013 年 4 月から半年間、ドイツ連邦共和国のテュービンゲンに滞在し、ドイツ南部の民俗衣装とその活用について調査する機会をいただいた。ドイツは地方自治の歴史が長く、各地で独自の民俗衣装が発達してきた。現在、民俗衣装着用の機会は減少しているが、地域の同好会活動や博物館での普及活動によって存続への努力が続けられている。本論文では、民俗衣装を保存・展示している博物館や研究所での調査や教会行事・パレードでの調査などをもとに、ドイツ南部のバーデン - ヴュルテンベルク州を中心に、民俗衣装がどのように保存され、また、継承されているのかを述べる。

### 2. 民俗衣装の発達

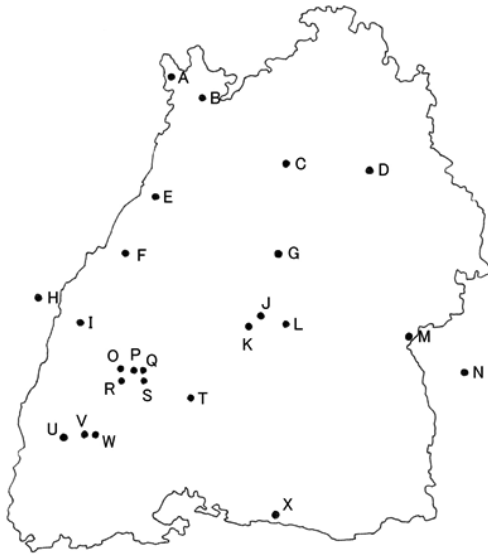
ドイツの民俗衣装の基本形は男性がシャツに半ズボン、ベスト、ジャケット、女性は薄い色のブラウスにスカート、胴着、エプロンである。胴着以外に首回りに肩当状のものをつける場合や、ジャケットを羽織る場合がある。胴着の刺繍やエプロンの柄は、地域や宗教、年齢、未婚・既婚の別によって異なる。

ドイツの民俗衣装は 18 世紀半ばから 19 世紀末にかけて発達してきた。ドイツでは 17 世紀前半の 30 年戦争で農村人口が激減した。例えばヴ

ュルテンベルクでは、戦争と占領、暴行、伝染病により人口が 45 万人から 10 万人にまで減少している。18 世紀前半に人口が回復してくると、農民は次第に財力をつけるようになり、自分たちの衣服様式を持つようになっていった。18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、ロマン主義が台頭し、自然や庶民・農民の暮らしに関心が集まるようになると、都会の知識人が農村の伝承や衣装などにも注目した。これと相まって、農民たちにも自分たち独自の衣装を明確にする動きが起き、民俗衣装の発達が鮮明になったと言われている<sup>1)</sup>。19 世紀の終わりまで、民俗衣装は絶え間なく発達したが、20 世紀に入ると、交通網の発達と産業構造の変化、簡便な既製服の浸透によって、次第に日常生活から排除されていた。

### 3. シュヴァルツバルトの民俗衣装

バーデン - ヴュルテンベルク州南西部に位置するシュヴァルツバルト地方では、点在する町や村に独自の伝統的な民俗衣装がみられる。18 世紀の終わりごろから、農村の人々は自分たちらしさを表現するものとして、裕福な農場の所有者の習慣を模倣して、日曜日や祭日のための特別な装いを発達させてきた。衣装の基本的な組み合わせは他の地域と同様であるが、ベストや胴着に施す刺繍の色や文様、肩当ての色や刺



- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| A マンハイム           | O ハスラッハ     |
| B ハイデルベルグ         | P グータッハ     |
| C ハイムブロン          | Q キルンバッハ    |
| D シュヴェービッシュハル     | R ミューレンバッハ  |
| E カールスルーエ         | S ライヘンバッハ   |
| F バーデン・バーデン       | T ロットヴァイル   |
| G シュトゥットガルト       | U フライブルク    |
| H ストラスブール         | V ザンクト・ペーター |
| I オッフエンブルク        | W ザンクト・モルゲン |
| J テュービンゲン         | X コンスタンツ    |
| K ロッテンブルク・アム・ネッカー |             |
| L プフリンゲン          |             |
| M ウルム             |             |
| N クルムバッハ          |             |

図1 バーデン・ヴュルテンベルク州の都市と調査地

繡は、場所によって異なっている。特に祝祭日用の帽子は地域によって多数の種類がある。ビーズをちりばめた冠（シェベル）、毛糸で作った大きなボンボンをつけた麦わら帽子ボレンフット、金糸刺しゅう入りのボンネットなどである。オッフエンブルクからフライブルク周辺までのシュヴァルツバルト西部周縁部では、フランスのアルザス地方の影響を受けており、大きな黒いリボンをボンネットに付けている。また、東部ではシュヴァーベン地方からの影響を受けている。以下には、特徴的なかぶりものについてまとめる。

(1) 冠（シェベル）

シェベルはシュヴァルツバルト中部、南部からシュヴァーベン地方まで、各地で身に付けられている冠である。針金で王冠の形に骨組みを作り、色とりどりのガラスビーズやスパンコール、赤や白のリボンを編み込んだものである。地域によってサイズは様々で、ほんの握りこぶし大の小さなものから、頭よりもはるかに大きく重いものまであり、ビーズの色の組み合わせも異なる。ガラスビーズに使う吹きガラスはシュヴァルツバルトの産品であったが、最近ではプラスチック製ビーズを用いるようになっている。冠の背部にはスカートの裾まで達する



写真1 冠（シェベル）

長いリボンを飾り、さらに小型ミラーや小さな造花をつける地域もある。この冠は、ザンクトペーターやザンクトメルゲンでは少女が最初の堅信礼からかぶりはじめ、聖体祭や感謝祭、最後は自身の結婚式まで、特別な祝祭の際に身に着ける。結婚式にかぶることからブライダルクラウンともよばれる。この冠は製作に手間がかかり高価であったので、かつてザンクトメルゲンでは教区の財産として保管されていたという<sup>2)</sup>。

## (2) 毛糸玉帽子（ポレンフット）

シェペルよりもさらに特徴的な帽子としては、毛糸のボンボンをつけたポレンフット（毛糸玉帽子）がある。この帽子は、もともとシュヴァルトツバルトのグータッハ、キルンバッハとライヘンバッハの3カ所でのみ、プロテスタントの福音派によってかぶられていた。麦わら帽子の表面に白い漆喰を塗布して形を固定し、巨大なウールの毛糸で作った玉11個を帽子の表面全体に配置したもので、重量は2キロにもおよぶ。毛糸玉帽子の原型は1720年に作られていた麦わらで編んだ帽子である。帽子は簡単なかぶり物としてだけでなく、次第に祭り衣装としてもかぶられるようになった。グータッハの婦人用帽子屋が薔薇色の帽子のデザインを編み出した。元来は帽子に描いていた赤や黒の輪を、毛糸で作った小さな花に変え、さらに、1900年前後には14個の毛糸玉を十字に交差させて配置するようになった。その後、より重くボリュームを持たせたいという人々の好みで、帽子全体に光沢



写真2 毛糸玉帽子（ポレンフット）



写真3 1900年ころの毛糸玉帽子

のあるように塗りを施すようになった。毛糸玉はより大きく豪華になって帽子全体を覆うようになったが、配置できる個数は11個に減少した。赤の毛糸玉帽子は結婚前の女性だけがかぶることのできるものである。少女たちは堅信礼からかぶり始め、復活祭や感謝祭でかぶり、結婚後は控えめで上品な黒い毛糸玉帽子となる。

毛糸玉帽子に合わせるのは大きなパフスリーブのブラウス、刺繍入りのベルベットの胴着とギャザースカート、エプロンで、さらに、首回りにベルベットに刺繍入りリボンを縫い付けた別衿をつけている。

## (3) 民俗衣装の製作者

豪華に飾られた冠や刺繍には手仕事の重要性がみてとれる。村では伝統的な衣装は手作りで、共同作業で作られていることが重要であった。現在は衣装や冠、刺繍職人は減少しつつある。伝統的な衣服を製作できる職人はハスラッハにはいないが、シュヴァルトツバルト全体では数名いるという。毛糸玉帽子の製作者はグータッハとキルンバッハに1人ずつ居住している。ガブリエーレ・アペーレは自分の工房を持ち、ホクツ・バオアーンホフ野外博物館などでも製作実演を行っている。彼女は自分の母親から帽子製作の技術を学んだ。すべて手作業なので、1つの帽子製作には一週間かかるという。アニタ・ヴェーレはシュヴァルトツバルトで最後のシェペル製作者の一人になっている。シェペルの製作にはビーズ、ミラー片、ラフィアやワイヤーな



写真4 帽子製作者ガブリエーレ・アペーレ

どが必要で、製作時間は 60 時間かかる。

#### 4. 博物館と民俗衣装

ドイツでは人口が数千人から 1 万人くらいはかなり小規模な市や町にも博物館や美術館がある。民俗衣装を所蔵する博物館はこのような小規模な市や町にあることが多い。この章ではバーデン - ヴュルテンベルク州にある民俗衣装を所蔵する博物館の中から、衣装博物館 2 館、野外博物館 1 館を紹介する。

##### (1) シュヴァルツバルト衣装博物館

ハスラッハにあるシュヴァルツバルト衣装博物館では、シュヴァルツバルト各地方のオリジナルの民俗衣装をマネキンに着せて展示している。建物はカプチン会の修道院だったものを利用しており、隣接する教会はそのまま残されている。展示は修道院の 2 階部分が中心である。1 階の展示場入口には民俗衣装の形態の分布を示す簡単な地図が掲げられ、理解を助けている。展示は「帽子とかぶりもの」「結婚式の冠」「平日の衣服」「祝祭日の衣装」の主に 4 つのテーマでなされている。展示場はいくつもの小部屋に分かれているので、衣装も地域ごとやテーマごとに分類し、各部屋に設置したガラスケース内にマネキン数体ずつ、約 100 体を展示している。民俗衣装以外にも地域の伝統芸能であるファスナハトの衣装マネキンも飾られており、合計約 120 体がある。

博物館は 1980 年開館であるが、開館 3 年前から資料収集を行った。館長のアロイス・クラフティック氏によれば、シュヴァルツバルトの民俗衣装でオリジナルなものばかりを寄贈しても



写真5 シュヴァルツバルト衣装博物館



写真6 展示風景

らったものがほとんどであるが、一部はわずかだが代金を支払ったものもあるという。収集衣装はシュヴァルツバルト全域を網羅している他、ブライスガウ（バーデン南部）、マルクグレーブラーランド（ドイツ南西部）のものもあり、たいへん充実した内容となっている。

##### (2) ホクツ・バオアーンホフ野外博物館

グータッハにあるホクツ・バオアーンホフ野外博物館は、1964年にバーデン - ヴュルテンベルク州では最初の野外博物館として開館した。学芸員のナディア・サイバート氏によれば、シリーズ氏がグータッハの伝統家屋の保存の目的で開館し、その後シュヴァルツバルト各地の家屋も移築したという。敷地面積は 12 エーカーと民家園にしては小規模である。博物館にあるグータッハの家屋は 1612 年創建で、1816 年当時は 3 家族によって所有され、最後の家族は 1965 年まで住んでいたという。このグータッハの家屋の部屋には農民の衣装が展示されている。グータッハ、キルンバッハ、ライヘンバッハの赤の



写真7 ホクツ・バオアーンホフ野外博物館

毛糸玉帽子、黒の毛糸玉帽子とその衣装、キンツィヒ谷地方から提供された衣装と花嫁の王冠、ホッツェンヴァルトの衣装、フルトヴァンゲンの衣装である。

この野外博物館では家屋内に衣装を展示するだけでなく、様々なイベントを開催している。2013年7月7日には「衣装・踊り・伝統」と題して、各地のフォークダンスグループと民俗音楽グループのステージ、毛糸玉帽子製作実演などが行われた。民俗衣装縫製の実演や機織り実演なども定期的に行われており、来場者は民俗衣装を身近なものに感じることができる。

### (3) ヴェルテンベルク衣装博物館ブフリンゲン

ブフリンゲンはバーデン - ヴェルテンベルク州のシュヴァーベン高原にある小さな市である。古い水車小屋と穀物工場の建物を利用して作られたヴェルテンベルク衣装博物館では、シュヴァーベンアルプフェラインが収集した旧ヴェルテンベルク王国とその周辺の農民の衣装を展示している。博物館は4階建てで、現在も稼働する粉ひき水車の設備の傍らに、農民の仕事着・日常着を男女・子どものマネキンに着用させ、農具とともに展示している。2階は企画展会場で、2013年は開館25周年を記念して「バロックにおける農民の胴着展」を開催していた。館長のドロシア・ブレナー氏によれば、いくつかは、バルデンブッフのヴェルテンベルク州立博物館民族部門からの借用であり、他は地元衣装グループの協力で集めた博物館のコレクションであるという。3階、4階は常設展示場で、地域ごとに日曜日・教会礼拝用の衣装、祭礼用の衣装をまとった多数のマネキンと帽子、ショール、バッグ、靴などの小物が展示されている。各展示はパネル説明がつけられており、さらに3階には各地域の衣装の特徴を地図上のタッチパネルで検索できるシステムも設置されている。奥の小部屋には、教会礼拝用の衣装をまとったマネキン群が置かれている。マネキンはいくつかの場面に分かれてまとまっており、部屋の操作パネルを押すと各場面の台詞が流れる仕組みである。

この博物館はシュヴァルツバルト衣装博物館



写真8 ヴェルテンベルク衣装博物館ブフリンゲン



写真9 仕事着の展示風景

と同様に、所蔵衣装の点数が多い。さらに、企画展も開催し、毎週水曜日には地域の裁縫グループの集まりを行って、技術の継承に努めている。地域には欠かせない重要な博物館である。

## 5. 宗教行事と民俗衣装

ドイツでのキリスト教の宗派分布をみると、バーデン - ヴェルテンベルク州では「カトリック1人に対し、プロテスタントも1.1人程度」である<sup>3)</sup>。カトリックとプロテスタントでは宗教上の生活習慣に相違がみられる。坂井氏によれば、プロテスタントは宗教上の合理化・近代化が特徴であり、日曜日の礼拝と結婚式などの儀式の時のみ教会に行くのに対して、カトリックには聖者像の礼拝や巡礼の習慣など、旧態然とした習慣が残っているという<sup>4)</sup>。この点は、日曜日に教会のミサへ行く際の衣装にも影響を与えている。シュヴァルツバルトのザンクトペーター村には立派なカトリック教会がある。2013年5月19日の聖霊降臨祭はあいにくの雨天であっ



写真 10 聖霊降臨祭のミサに来た人たち  
(ザンクトペーター村)



写真 11 ミューレンバッハ村の聖体行列  
(聖体祭 2013 年 5 月 30 日)



写真 12 民俗衣装で聖体行列に参加  
(聖体祭 2013 年 5 月 30 日)

たが、ミサには地域の年配女性や 40 代くらいのカップルが民俗衣装の正装で参加していた。

5 月下旬には聖体祭という宗教行事がある。聖霊降臨祭の後の第二木曜日に、キリストが最後の晩餐の秘蹟を制定したことを祝うカトリックの行事である。バーデン - ヴュルテンベルク州では祝日にあたり、2013 年は 5 月 30 日であった。シュヴァルツバルトのミューレンバッハ村では、教会でのミサの後に聖体行列を作って聖所を巡り、その行列には民俗衣装の男女が参加するという情報を得たので、実際に聖体祭を見学した。

前日に村を訪れると、すでに教会前には一部の飾り付けがされていた。インフォメーションセンターの担当者によれば、「村の人口は 1800 人ほどだが、聖体祭には 1~2 万人が集まる。当日早朝の 4 時か 5 時ごろから花びらを聖体行列が通る路上中央に敷き詰めて、花の絨毯を作る。道沿いの家が担当であるが、1 軒でだいたい 10 m ほどを飾る。教会から出発して村を一周する順路は、全体では 1km ほどの長さで、この区間が花の絨毯で飾られる」とのことだった。村を散策してみると、家族総出で庭先に花びらを準備している家があった。

聖体祭当日、8 時 30 分ごろに村に到着するとすでに道路中央に幅 1m ほどの花の絨毯が完成していた。赤、黄の花やシダの葉で幾何学的な文様、聖杯や天使などの絵を施し、ドイツ語のことばも入っている。9 時から 1 時間、教会でミサを行った後、参加者は聖体行列を整えて、村を一周した。行列の先頭には教区の守護聖人を描いた幟が立ち、その後には十字架、十字架の幟、幼子キリスト像の神輿、マリア像の神輿が続く。幟はミニストランテンと呼ばれる衣装を着た司祭の侍者を務める少女、幼子キリスト像の神輿は同じく侍者の少年、神輿は民俗衣装を身に着けた若い女性 4 人が持つ。その後には民俗衣装姿の男性、少年・少女、女性たち、そして吹奏楽の楽隊が演奏しながら続き、村の有力者、キリストの磔像、侍者の少年少女、信者が掲げる天蓋の下に司祭、キリスト像の神輿、村人たちといった順に、行列が構成されていた。村の要所 3 か所と教会前の合計 4 か所には祭壇が設けられ、祭壇前は特別な花の絨毯が設けられてい

た。祭壇では行列が止まり、司祭が祈りをささげると、行列の参加者も跪いて祈る。行列は約1時間かけて村を一周し、再び教会へ入って祈りをささげた。

カトリック教会では行列は教会の外での礼拝であり、神に対する表敬行為であるという<sup>5)</sup>。祭日に催される行列は教会の公式行事であるが、民衆文化的要素があり、悪霊を祓い、清める意味も持っている。また、土地を清める意味からは豊作祈願の意味も持っている。聖体祭の行列も豊作祈願や民衆の娯楽的な要素があり、そのために長く存続してきたと下田は述べている<sup>6)</sup>。この行列に参加した地域の人達は誇らしげに民俗衣装を着て、厳粛な面持ちで祈りをささげていた。民俗衣装はその村の一員としての自覚を促すために、また、自分たちの信仰の深さを表すためにも必要なものであり、宗教行事とともに受け継がれていると言えるであろう。

## 6. 地域のシンボルとしての民俗衣装

ドイツでは民俗衣装が注目されはじめた19世紀から、地域の独自性を如実に表現するものとして衣装が利用されている。河野によれば、19世紀からバイエルン国王夫妻の銀婚式や皇太子の結婚式といった記念行事で、民俗衣装行列が行政側から企画・実施されている<sup>7)</sup>。ここでは、現在のパレードの例をあげ、さらに、州のシンボルとなった帽子についてまとめる。

### (1) パレードの主役として

ドイツの祭や祝日にはパレードがつきものだが、その際は近隣のフォークダンスグループ、音楽グループ、衣装グループなどのメンバーが揃いの民俗衣装で参加する。例えば、2013年9月8日にロッテンブルク・アム・ネッカーで開催されたバーデン-ヴュルテンブルク州の祝日「郷土の日」パレードには86団体が参加し、2時間半におよぶ盛大なものとなった。グループの所在地の民俗衣装を着るグループもあるが、テイストを採り入れて新しく衣装を創造しているグループもある。民俗衣装でなく中世や近世の時代衣装で登場するグループもあり、農家の仕事着を着ているグループもある。各グループ



写真 13・14 祝日パレードの様子

(2013年9月8日)

は先頭に自分たちのグループ名や地域を明記したプラカードを立てて行進するので、それぞれの地域の代表として誇らしげに行進してくる。沿道には観客数千人が詰めかけ、盛んに声援を送っていた。さらに、この祝日を記念して、町の博物館では州全体の民俗衣装を集めた展覧会「すばらしい衣装」を開催していた。マネキンに各地から出品された男女と子どもの民俗衣装を着せて展示している。パレードには参加しない地域の衣装もあり、州の衣装の全体像を知らせる意義もある展示であった。

さて、パレードに参加したグループの中にはフェライン（同好会）に属する集団もある。フェラインとは「共通の目的のために自発的に人びとが集まって形成する集団」<sup>8)</sup>である。例えば前述のシュヴァービッシャー・アルプ・フェラインは1888年設立であり、ホームページによると設立当時のメンバーは500人ほどだったが、19世紀末には2万人、1971年には10万人になり、現在は11万人を超える組織になっているという。このフェラインに属する具体的なグルー

プは、民俗ダンス、民俗衣装、フォークロア、民俗音楽、歌謡、ふるさと、方言などがあり、総数 600 に達している。グループには子どもから高齢者まで世代を超えたメンバーが集っており、パレードにも各世代がそれぞれの衣装で登場する。グループやフェラインは常に会員を募集しており、自分たちの衣装をホームページで宣伝していることも多い。グループは有料であり、パレードへの参加はボランティアであることが多い。子どものころから世代を超えた集団に属し、伝統衣装やダンスを楽しみながら学ぶことが、その地方の文化継承に自然に結びついていると言える。

## (2) 毛糸玉帽子のシンボル

シュヴァルツバルトの毛糸玉帽子はデザインがシンプルであるがゆえに、他の帽子よりも人目を引く。特に鮮やかな赤色がポイントの毛糸玉帽子は未婚・既婚の区別を表す役割のみならず、長い時を経て、シュヴァルツバルトやバーデン-ヴュルテンブルク州のシンボルになっていった。以下にその経緯をまとめる。

19 世紀末から 20 世紀にかけて、画家ヴィルヘルム・ハゼマン (1850-1913)、カート・リービヒ (1868-1937) はグータッハに滞在し、シュヴァルツバルトの風景、農村、人々の生活や仕事を描いている。2 人は画家であり、イラストレーターでもあって、民俗衣装にも関心を示した。彼らの描いた毛糸玉帽子の女性の絵は絵葉書にもなって、この衣装の存在を広く知らせることになった。グータッハには芸術家コロニーが設立され、多くの画家がシュヴァルツバルトの風景と民俗衣装、特に毛糸玉帽子の女性を描いている。

1939 年には、典型的なシュヴァルツバルトの風景の前に毛糸玉帽子の少女を配した広告のパンフレットを観光協会が制作した。国外にも毛糸玉帽子の存在が知られるようになったと言われるのは、1950 年にテレビで放送されたホームムービーの「黒い森ガール」であったといわれている。これはドイツ初のカラーフィルムで、大ヒットし、何百万人もの視聴者がいたという。

9)

現在では、毛糸玉帽子の少女は人形や帽子の

マスコットが作られ、実物大の毛糸玉帽子の廉価版 (フェルトによって簡単に製作した帽子) も登場している。衣装の絵や写真は食器類、文房具、レコードジャケット、書籍など数々のものにプリントされている。また、バーデン=ヴュルテンブルク州観光局は 1993 年に、文字の SCHWARZWALD と毛糸玉帽子のマークを作った。2009 年には、マークの外観がリニューアルされ、湾曲したベースラインを持つ 5 つの玉と文字がシュヴァルツバルトを象徴している。毛糸玉帽子をアレンジしたマークは牛乳、ハム生産などの地域の企業でも用いられている。



写真 15 地域のシンボルマーク  
(左: 牛乳パック 右: 観光局のマーク)

## 7. シュヴァーベン服装文化研究所の取り組み

この研究所は 1999 年開館で、シュヴァーベン地方やバイエルン州のオリジナルの衣装を収集・保存し、製作者からの聞き取りを記録し、服飾文化を普及する活動を続けている。研究所に寄託された民俗衣装類は約 2000 点あり、地域・種類で分類されて、研究に利用されている。研究所では民俗衣装に関するセミナーを実施し、衣装製作の相談受付、衣装のパターン作成を行っている。セミナーは専門家を対象にした実習もあるが、趣味として手芸に取り組む愛好家への指導も行っている。年に 1 回、ミュージアムで保存指導をしている。小さなミュージアムでの衣装展の指導を担当し、展示のあとには本も書く場合がある。今は仕立ての仕事よりも、指導やレクチャーに重点をおいている。職員は 4 名で、リーダーで衣装コンサルタントのモニ



カ・ヒューデ氏、縫製技術者 2 名（うち 1 名はマイスター）、秘書 1 名である。

### (1) 展示

1 階のケースでは各地のボンネットを展示。黒はこの地域のもので少し新しい、一般の人のもの、1820 年代の銀のボンネットは少し古いもので、教師がかぶっていたものである。これらは階層がちがうと衣服も異なるという例である。プロテスタントの子供のボンネットも展示している。研究所では、これらの資料からボンネットを復元している。



写真 17 再現したひだ飾り



写真 16 衣装を復元した 3 体のマネキン

奥の部屋には昔の衣装の復元衣装を展示している。右のドレスは胴着の骨組みにプラスチックを使用している。中央のドレスはエプロンがシルクで、下の衣装の模様が透けてみえるようになっていた。今はスカートにポリエステルを使用。上着は裏地に赤い布を使い、見えるようにしている。左のドレスはカラコで、20 年前の古いカーテン地によいものがあつたので、それを使って復元している。(写真 16)

### (2) 研究・調査

研究所ではドイツの古い衣装についての調査研究を継続して行っている。マールブルク近郊に在住の老婦人から昔の仕立て方、消えつつある部分的な装飾技法の数々を教わり、現在も博物館近郊での調査を継続している。また、縫製技法の保存面では、2012 年に『リュッシュェン』<sup>10)</sup> を出版した。この本は 1810 年から 1950 年までのシュヴァーベン地方の民俗衣装の身頃部

分や丈の短い上衣に施されているひだ飾りを、資料の写真や図とともに紹介し、実際にこれらのひだ飾りを再現する場合の材料、基礎縫いの方法、個々のひだ飾りの技法をわかりやすく解説している労作である。

これまでの衣装の調査研究以外にも、衣装全体の再現にも取り組んでいる。現在は 20 世紀に生産されていたのと同じの生地は手に入らないが、できる限り元の形に近く仕上がるように注意しているという。公立の研究所であるので、民俗衣装の製作には真正性を重視している。また、アパレル CAD を利用して 19 世紀の衣装の身頃部分のパターンをそれぞれのサイズに合わせて製作できるソフトも開発している。

研究所リーダーのモニカ・ヒューデ氏はテーラーのマイスターであり、後にマクシミリアン大学民俗学科で学び、修士号を取得した人物である。ヒューデ氏が学んだ頃は、マイスターの資格取得には職業訓練学校での 3 年間の訓練に加えて、マイスターであるプロ職人のもとでの 3 年間の徒弟奉公が必要であった。厳しい訓練で培った洋裁技術と研究能力を総合して、民俗衣装の保存継承活動に活かしているのである。

### (3) セミナー・講習会

民俗衣装の製作、縫製技術講習会が開催されている。2013 年の実施内容は以下のとおりである。

- ・手芸の集い 「ボビンレース、手芸、裁縫」
- ・コース 「裁縫の一日：ピーダーマイヤー様式の胴着とスカート、ジャケット」「毛糸編み：

シヨール、セーター」「ビーズ入り手首ウォーマー」「平日の仕事着の基礎」「カラコの縫製」「南部の刺繍入り婦人帽子」「捺染手染め」「衣装縫製のいろいろ：フレアスカートとエプロン」「紳士用シャツの縫製」「金糸刺繍」「ロココ時代、バイエルン地方の胸飾りの縫製」「基礎コース：装飾ボタン 古い技術を応用したカラフルなボタン作成」「ひだ飾り一生地 of 三次元的展開のコツや技法」

#### (4) 民俗衣装への視点

モニカ・ヒューデ氏によれば、民俗衣装は時間とともに少しずつ変化しているという。1860年代から70年代のドイツはビーダーマイヤー様式の時代で、バイエルン州のベストコスチュームとしてショーなどで着られているのは、ビーダーマイヤー様式の衣装が多い。つまり、19世紀半ば以降に現在に伝わる伝統的な民俗衣装が確立したと言えるということであった。

現在、バイエルン州で民俗衣装が着られるのは、オクトーバーフェストなどの祭やダンスイベント、結婚式、クリスマス、復活祭、聖体祭などの教会に関する行事の時である。祭やイベントにかかわるフェラインでは伝統的な衣装を重要視しているので、衣装の継承にはフェラインの活動が活発になることも大切である。

技術面、素材面など、民俗衣装の継承には困難が伴うが、できるだけ衣装の真の姿を留めることができるように、数々の取り組みを通して努力が続けられている。

## 8. まとめ

南ドイツに残る民俗衣装の保存と継承の実態を知るために、博物館や研究所の取り組みを調べ、教会行事、地域の祝日パレードなどを調査した。小規模な都市が分散しているドイツでは、州や地域ごとに民俗衣装が収集・展示され、地域の人々が保存活動に取り組んでいた。活動は行政まかせでなく、同好会組織がボランティアで運営している場合が見られることも、驚かされる点であった。同好会やグループに幼いころから所属することによって、子どもは世代間の交流を深め、お年寄りから地域の文化を学び、

さらに地域への帰属意識を高めることもできる。また、美しい民俗衣装を身に着けてパレードで行進することは彼らの誇りでもある。町や村ごとに細部が異なる民俗衣装は見ている飽きることがない。町並みと自然の風景が美しく保たれているドイツでは、民俗衣装も住民の力で今後も受け継がれていくであろう。

#### 引用文献

- 1) パトリシア・リーフ・アナワルト：『世界の民族衣装文化図鑑 1』, 終風舎, 100-101 (2011)
- 2) W.Werner-Künzig: 『Schwarzwälder Trachten』 Badenia Verlag, Kalsruhe, 30(1981)
- 3) 坂井洲二：『ドイツ民俗紀行』, 法政大学出版局, 262 (1982)
- 4) 坂井洲二：前掲書, 265 (1982)
- 5) 下山淳：『ドイツの民衆文化 祭り・巡礼・居酒屋』, 昭和堂, 141 (2009)
- 6) 下山淳：前掲書, 147 (2009)
- 7) 河野眞：『フォークロリズムから見た今日の民俗文化』, 創土社, 393 (2012)
- 8) 若尾祐司他：『ドイツ文化史入門』, 昭和堂, 170 (2011)
- 9) T. Hafen: 『Schwarzwaldmädel』, Schwarzwälder Freilichtmuseum Vogtsbauernhof, 39(2007)
- 10) M. Hoede: 『RÜSCHEM』, Bezirk Schwaben, (2012)